

新年度のスタートとなりました。この時期になりますと、仕事上で「気持ち新たに」と思うのですが、データを詰め込み過ぎて動きが悪くなった。旧型パソコンのように、年を重ねるにつれて、古いデータ（良く言うところの経験かな？）で一杯となった頭や体が、新しさを受け入れることを拒むかのように動きが鈍くなっているのを感じます。それは時間が経つ感覚的早さとも比例していて、年々、時が過ぎて行く感覚も早くなっているように感じます。

これはいかんと奮起して、慌てて頭の中のスペースを広げようと、 unnecessary データの消去を試みてみるものの、もともと整理の苦手な性格、なかなかスムーズにはいきません。そんな、旧型パソコンではありますが、新年度も、フリーズを起さずに励んでいきたいと考えています。

小さなたね開所から5年、その間にも、障がい福祉における制度や社会資源も大きく変わってきています。新たに事業所の特色や役割も明確になってきているように思います。そんな中で、小さなたね

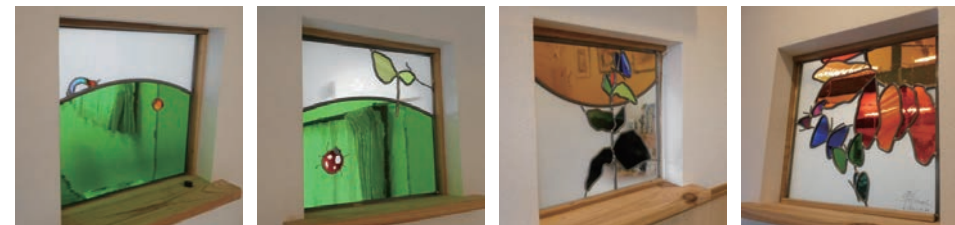


♪サクラ、咲いたよ!!

の特色と役割を考えつつも、重い障がいをもつ方々の地域生活が四角四面で括られないように、常にフレキシブル（しなやか）でありたいと願っています。

段々と、旧く、なっていく私ではありますが、それでも決して、固く、ならないように、常に「柔らかい心」を保持していきたいと思っています。そのために、目の前の事柄をしつかりと見つめながら、今必要なものは何であるのか、自分には何が出来るのかを考えながら歩を進めていきたいと思っています。

所長 水野 英尚



小さなたねの物語が描かれたステンドグラス（ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈）

たねスタッフのつぶやき

新年度が始まりました。たねで仕事をさせて頂くようになって一年が経ちました。本当にあっという間に過ぎていった気がします。

数十年ぶりの仕事復帰は不安ばかりのスタートでしたが、利用者の子もたちとのふれあいはとても充実した日々です。また、季節を通じての様々な行事や催しは、私自身も一緒に楽しんで参加しています。たねでの利用が安心・安全をモットーに頑張りたいと思いますので、どうぞ今後ともよろしくお願いたします。

今村玲子（看護師）





医療法人にのさかクリニック
地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区梅林 6-23-3
電話 092-874-3051 FAX 092-874-3052
E-mail : chisanatane@tune.ocn.ne.jp



後記

たね通信の紙面作成にあたり、原稿をもらったのは、最初の地震の翌日。そのためすべての原稿が地震前に書かれています。作成をほぼ終えた今、熊本や大分ではなお震度3～4の余震が起き、まとまった雨も降り出しました。被害の拡大が心配されます。その後、たねには復興支援の募金箱が置かれました。熊本の各所から被害の情報が入りはじめ、具体的な支援が検討されています。息の長い支援が必要ですから、今後、紙面を通してもお伝えしていくと思います。情報や声などお寄せください。（E）

壁を壊し続ける

今から20年前、私は熊本県合志市（当時は合志町）に住んでおりました。当時の自宅から徒歩5分の所に「国立療養所菊池恵楓園」がありました。広大な敷地に公園やグラウンド、スーパ―や床屋さん、お寺も教会もあり、まるで「二つの町」のようでした。1907年（明治40年）の法律「癲予防に関する件」による国の隔離政策は、ハンセン病を患った人々を、本人の意思や人権に配慮することなく収容していきました。その後「らい予防法」の制定を経て、1996年に法律廃止となるまで、90年という長きにわたり、ハンセン病患者に対する差別や偏見を、多くの人に助長してきたのです。今なお入所者たちは、^{さへ}戻る事が困難だと言われています。この問題の闇の深さを示しています。

私が出会った中山弥弘さんは、後遺症のため視力を奪われ、手の10本の指が全てなく、両足は義足でした。12歳の時にハンセン病を発病してから、その人生（現在86歳）の全てが療養所での暮らしです。しかし、過酷で壮絶な人生を過ごしたとは想像もできないほど、穏やかな人柄と、優

しい声の持ち主です。私の重い障がいのある娘のことをいつも気にかけてくださり、「ひかりちゃんは大丈夫ですか？」と、常に穏やかに優しい声で尋ねてくださいます。そのような中山さんの人生は、私からすれば人生を呪い、恨み辛みをぶちまけて当然のような歩みであったにも関わらず、どうしてこんなにも穏やかで人に優しくなるのだろうか、私には十分理解できることはありません。しかし、考えてみますと、中山さんや菊池恵楓園との出会いがなければ、娘や同じように重い障がいのある人たちと向かい合い、自らのライフワークの課題とする人生の転換は、出来なかっただろうと思います。

今月4月より、「障害者差別解消法」が施行となりました。「障害」を理由として権利を侵害してはならず、暮らしにおける社会的障壁は、合理的に配慮しなければならなくなります。差別的禁止を法的に義務付けたのです。この国が差別根絶に向け、大きな一歩を踏み出すきっかけとなることを、心から期待しています。しかし、「差別」というものはそもそも人々の無理解や無関心から始まっているわけですから、まずは知ること、知らせること、伝えることが大切でありましょう。

ハンセン病や、その歴史を全く知らずにいた私が、中山

娘とのいろいろな思い出がよみがえるが、不思議と楽しい記憶より苦い経験のほうが思い出す。

☆

ある冬の日、朝から雪が降っていた。うっすらと積もり始める中、学校が大好きな娘を車に乗せ、通学のために車を走らせた。片道16キロの道を走っていくうちに、雪はどんどん激しくなり積もっていく。学校に通じる田舎道に入ったとたんに真っ白で轍のない道になり、ちょっと焦り。ブレーキは踏んじゃだめ！ ゆっくりゆっくりと走る。

どれくらいかかったのだろう、やっと学校の門が見えてきた。最後の難所、校門の坂を上る。あれっ、のぼらない、うーん！ 雪に全くの素人の私は雪をなめていた。しばらく坂と葛藤していると、心配した担任の先生が外に出てこれ、私の車を見つけてくれた。ありがとう！

先生曰く、「ご自宅に電話したら『もう出ました』と云われたので」と。まだ着いていない私たちを探しに来てくれたのだ。

その日の登校人数は半分にも満たなかったと記憶している。娘は雪がやんだ教室の外に出て、暑がりの友達と一緒に、外で嬉しそうに記念撮影。その日はお昼までで下校となった。

家に帰ると、心配していた家族から怒られた。無謀なことをするな、と。携帯電話をまだ持たない頃の昔の話です。

☆

携帯用の吸引器の調子が悪く、業者の人に修理を依頼し、代替品を貸してもらうことになった。「では、こども病院の受診時に外来で受け渡しを」と約束。当日、圧が弱くなった吸引器を渡し、代わりに業者さんの代替品を受け取り、帰路へ。



I work for Children
子どもたちのために働きます。

(Mr)childrenのLIVEに
行くためにも働きます♪



看護師 伊藤雅子



看護師 今村玲子



保育士 東島明子

草花好きの
スタッフ最年長

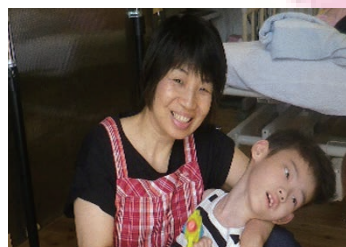


保育士 山口由美

たねでは「歌って踊れる
保育士」であり続けるこ
とを目指しています。

「小さなたね」 スタッフ紹介

断捨離始めて1年。
未だため込み癖治らず(汗)



看護師 羽原美佐代



看護師 井上明子

天然？ いえいえ、
ド天然らしいです。



管理栄養士 小淵智子

水・金のカフェランチを
食べに来て下さい。



所長 水野英尚

今から50の手習いを検討中。
何しようかな。

たねヘルパー最年長
ぼちぼち頑張っています。

皆さんのパワーを頂きな
がら頑張っています!!

磯有子

ヘルパーの皆さん

八坂幸代



たくさんの笑顔と
リラックスを！
自称癒しのヘルパ
ーです。

アラフォーですが、
気持ちは子どものまま。
皆さん沢山遊んでね。

出沒注意!!
第2・4土曜日と長
期休暇に現われます。



ヘルパー 畠中良子

コーヒーか
コーヒゼリーか
違いのわかる男です。



介護職 高橋健一



介護福祉士 渋谷瑞恵

意外と陽気な
おばちゃんです



ヘルパー 長野あや

楽しい時間を過ごし
たいと思っています。



ヘルパー 津原祐子

早良区のこりん星から
来ました。ゆうこり
んって呼んでくれた
ら嬉しいな。

スタッフ最年少。糸島
と周船寺のハーフです。



介護職 深町佳那



介護福祉士・社会福祉士
才津知尋

三十路の新人、
2年目を迎えました。
低燃費な体質になりたいです。

春の保護者懇談会のお知らせ

○日時…2016年5月12日(木)

13…30…14…30

○場所…地域生活ケアセンター
小さなたねのカフェスペース

小さなたね開所から5年。現状をお伝えすると共に、利用者の皆様からの要望やご意見など伺うことができたならと思います。そして、今後の取組みに繋げていければと考えております。ぜひ、ご参加下さい。

※なお、詳細は後日別紙にてご案内させていただきます。

途中、娘がゴロゴロと痰の音。はい、吸引するよーと、車中で吸引器を作動させると、えーっ、引かない!? うんともすんともいわない! わおー充電がされていない!! とんでもないこと、確かめなかった私も悪いが、業者の人も人だ。充電していない吸引器を貸すなんて! うちはしょっちゅう気管の吸引が必要なんです!!

もう少しよーと娘をなだめながら、どうにか家にたどりつきました。バッテリー交換じゃなくて、コンセントのみで充電する古いタイプの吸引器の頃です。

☆

こんなこともありました。

用事があり、ちょっと急いで車を運転していたら、道路にスピード違反の検問。あちゃー。

「はい、ちょっとこっち」への誘導で脇道に入りました。警察の方が車をのぞき込まれた瞬間、私はこんなことを口にしていました。「この子の体調が悪く、きつそうなので、急いで病院に連れていっているんです」

そのとき、確かに娘はゴロゴロ、ゼコゼコして顔色も白っぽかったのです。警察の方は注意はされましたが、「そうですか、気をつけて。でも安全運転だね」と送り出してくれました。その時の警察の方、ごめんなさい!

まだまだ苦い思い出はいろいろありますが、私みたいな親のところに生まれてよかったのかな、と反省しきりです。私はずっと娘と一緒に四六時中いられて、今は幸せだったなと感じていますが、天国の娘はどうだったのかな、と考える今日この頃です。

さんと出会い療養所に行くことで、これまでの価値基準が大きく変えられたように、その出会いと関わりによって、「差別」そのものが消えてしまふのだと思います。相手をすることは理解することに繋がるのです。同質なものを受け入れやすく、異質なものは不和や不協和音を起こすという理由で、集団から排除されやすいものです。「差別」の根源はそこから始まります。それは、一つの価値基準によって成立した社会であれば、どこにでも起こりうることです。

障害者差別解消法は、その価値基準に二石を投じる役割

を果たしてくれることでしょうか。しかし、大切なことはそこからです。法律で定めただけらといって、それで「差別」が無くなるほど簡単なものではありません。一人一人が、これまでの「ふつう」や「当たり前」といった価値基準と、「異質」さをもった事柄に、いかに向かい合っていくのが大切です。何よりもまず、出会うことでしょうか。つまりそれは、「障害者」ということではなへ、〇〇さんと呼べる関係性を築いていくことです。



春の陽気に誘われて……

「ハンセン病療養所」という括られた中では見えてこなかった事柄が、「中山さん」という一人に出会うことによって、いかに自分がこれまで病気や障がいによって、一人の人間を一つの枠組みに入れて捉えてしまっていたのかを大きく問われたように、重い障がいをもって生きる人たちもまた、社会の中では一人一人の個性が非常に見えにくくされて生きています。それは、自らの意思を表現していくことが困難で、生活における行為すべてに介助が必要であるということから、そのようになっているのだと思います。しかし、彼(女)たちが一人の個人として社会で暮らしていくためには、より多くの「〇〇さん」と呼べる関係性が必要になります。ところが、彼(女)たちの現実の生活環境は、なかなか関係性を築きにくいものです。それでも何とか、閉じないで開いていくこと、関係性の壁を作らないで、壁があるならそれを壊していくこと、そこから出会いは生まれてくるものではないでしょうか。あきらめずに、壁を壊し続ける歩みをしていきます。